

令和8年漁期イカナゴシニコ(新子)漁況予報

令和8年2月24日
兵庫県立農林水産技術総合センター
水産技術センター

1. 産卵親魚の調査結果

播磨灘北東部の鹿ノ瀬で、12月2日から1月6日にかけて延べ5回、文鎮漕ぎによる採集調査を実施した。

(1) 親魚密度

文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数は11.5尾で昨年の7.2尾をやや上回ったが、平年を大きく下回り、かなり低い値であった。年齢組成は1才魚が89.1%、2才魚以上が10.9%であった(表1)。

表1 親魚密度(文鎮漕ぎ1曳当たりの採集尾数)

	1才魚	2才魚以上	全体
今年	10.25尾 (89.1%)	1.25尾 (10.9%)	11.5尾
昨年	6.7尾 (93.1%)	0.5尾 (6.9%)	7.2尾
平年	120.4尾 (72.6%)	45.4尾 (27.4%)	165.8尾

(平年:昭和61~令和5年の平均値)

(2) 親魚の全長組成

2才魚以上の平均全長は昨年と同じ137.5mmであったが、1才魚の平均全長は100.7mmで昨年の105.3mmを下回った。その結果、親魚全体の平均全長も104.7mmになり、昨年の107.5mmを下回った(図1)。

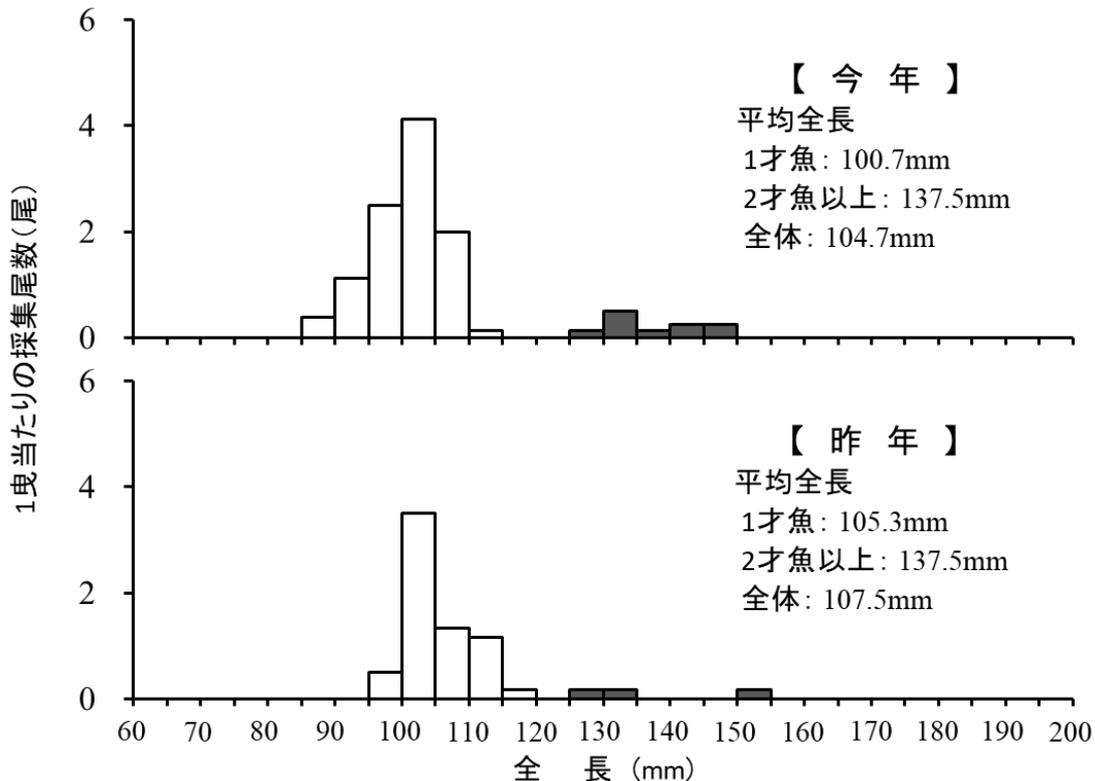


図1 親魚の全長組成

(3) 産卵量指数*

今年の産卵量指数は 0.15 で、昨年の 0.10 をやや上回ったが、平年 (2.96) を大きく下回り、平成 29 年以降低水準で推移している (表 2)。

*産卵量指数：総産卵量の目安となる数値。1 尾当たりの産卵量は親魚の大きさによって異なるため、毎年の親魚密度と全長組成から算出している。

表2 産卵量指数(昭和62(1987)年漁期の産卵量を1.00とした場合の相対値)

	1才魚	2才魚以上	全体
今年	0.11 (71.0%)	0.04 (29.0%)	0.15
昨年	0.08 (80.0%)	0.02 (20.0%)	0.10
平年	1.17 (39.6%)	1.79 (60.4%)	2.96

(平年:昭和61~令和5年の平均値)

(4) 産卵盛期

昨年は、雌親魚の生殖腺(卵巣)熟度指数が12月20日から1月6日にかけて低下したことから、産卵盛期は12月21日から1月6日の間と推察された。今年も12月25日の調査ではまだ産卵が始まっていなかったが、その後1月6日にかけて生殖熟度指数が急激に低下し、産卵の終了が確認されたことから、鹿ノ瀬における今年の産卵盛期は昨年よりやや遅い12月26日から1月6日の間と推察された。

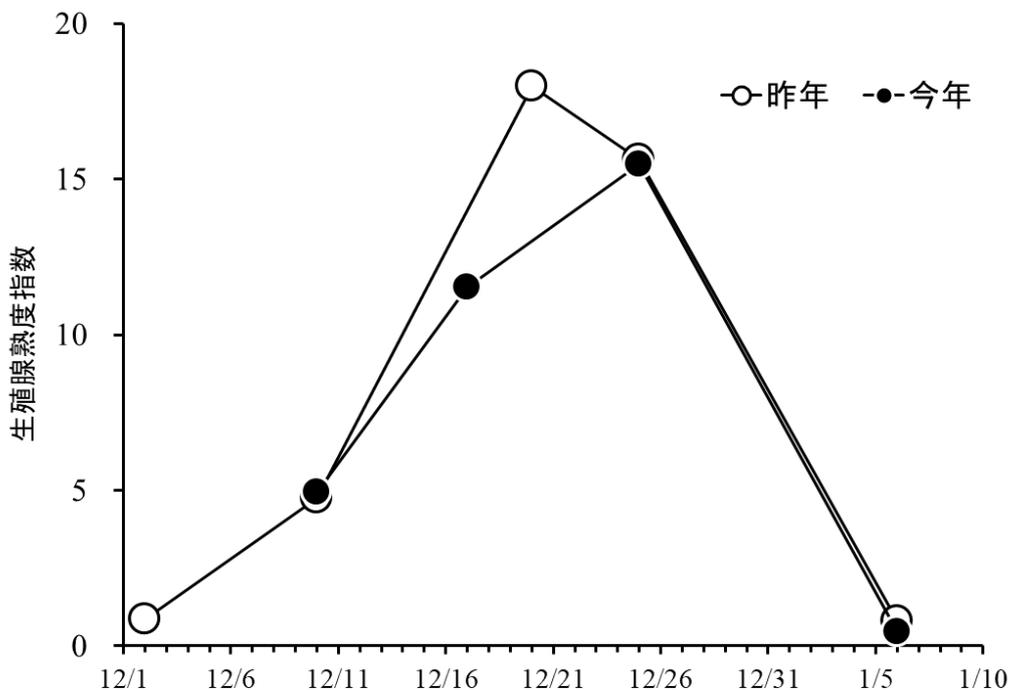


図2 雌親魚の生殖腺熟度指数の変化

2. 稚仔の調査結果

稚仔の調査は1月19日、27日、28日に実施し、表層から底層までの往復傾斜曳き（口径60cmのボンゴネット使用）により採集した。

1地点当たりの平均採集尾数は、播磨灘が0.05尾（昨年：0.1尾）、大阪湾が0.5尾（昨年：0.3尾）、紀伊水道が0.2尾（昨年：0.3尾）で、各海域とも平年を大きく下回り、産卵量指数と同様に平成29年以降低水準で推移している（表3、図3）。

稚仔の平均全長は、播磨灘が9.5mm*（昨年10.0mm）、大阪湾が9.6mm（昨年10.3mm）、紀伊水道が10.5mm（昨年6.0mm）であった（図4～6）。

*1尾の値

表3 海域ごとの稚仔採集尾数平均値（1m²水柱当たりの尾数）

	播磨灘	大阪湾	紀伊水道
今年	0.05	0.5	0.2
昨年	0.1	0.3	0.3
平年	8.2	12.2	2.5

（平年：ボンゴネットによる調査を開始した平成24～令和6年の13年間の平均値）

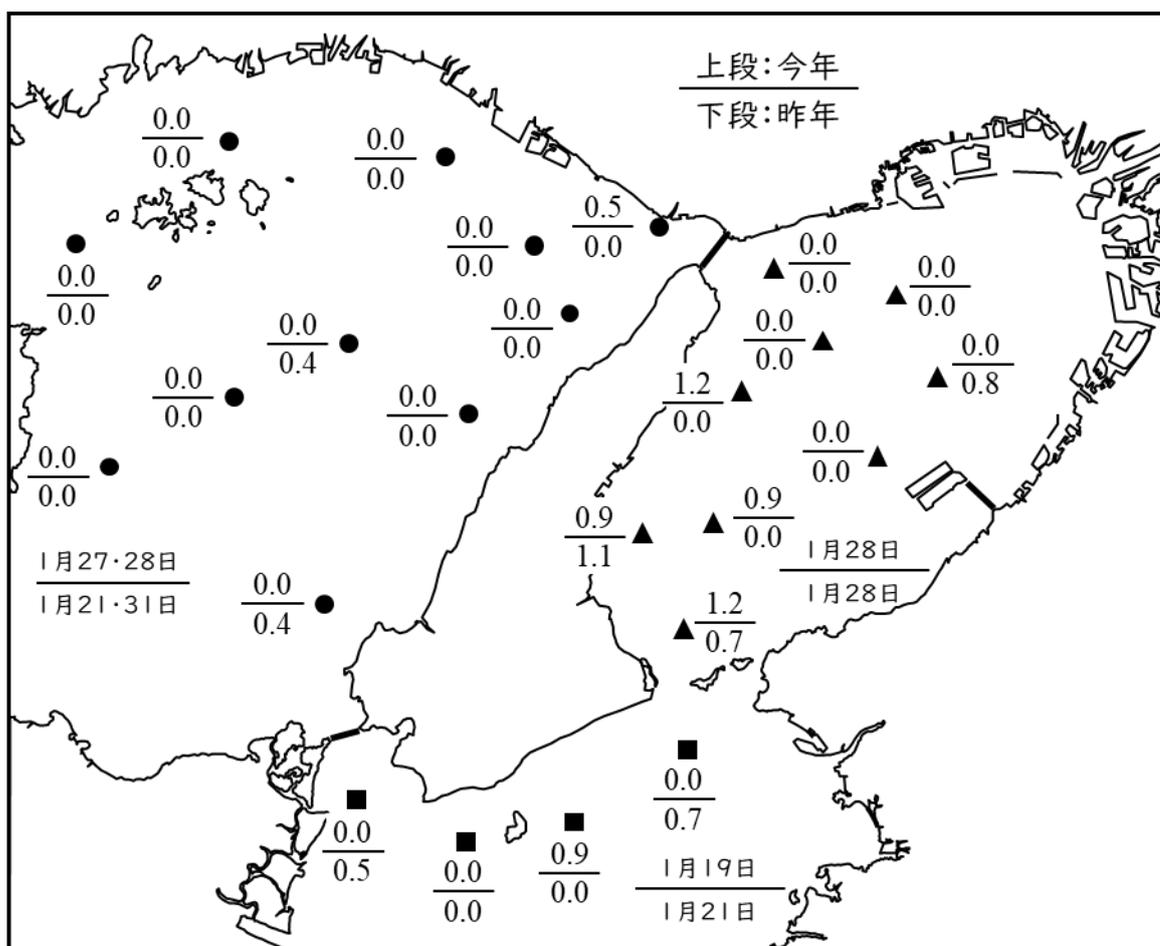


図3 稚仔の採集尾数(1m²水柱当たりの尾数)

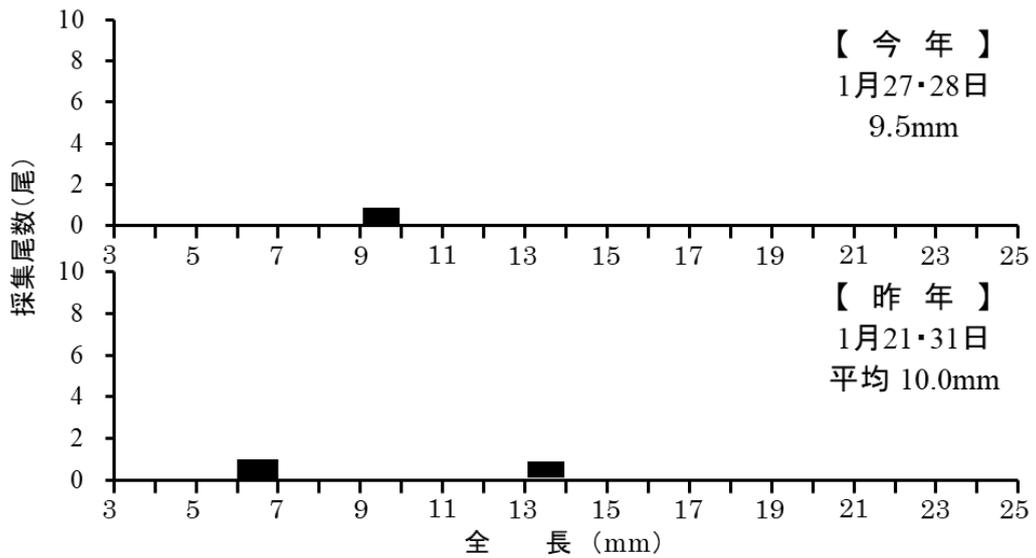


図4 播磨灘で採集された稚仔の全長組成

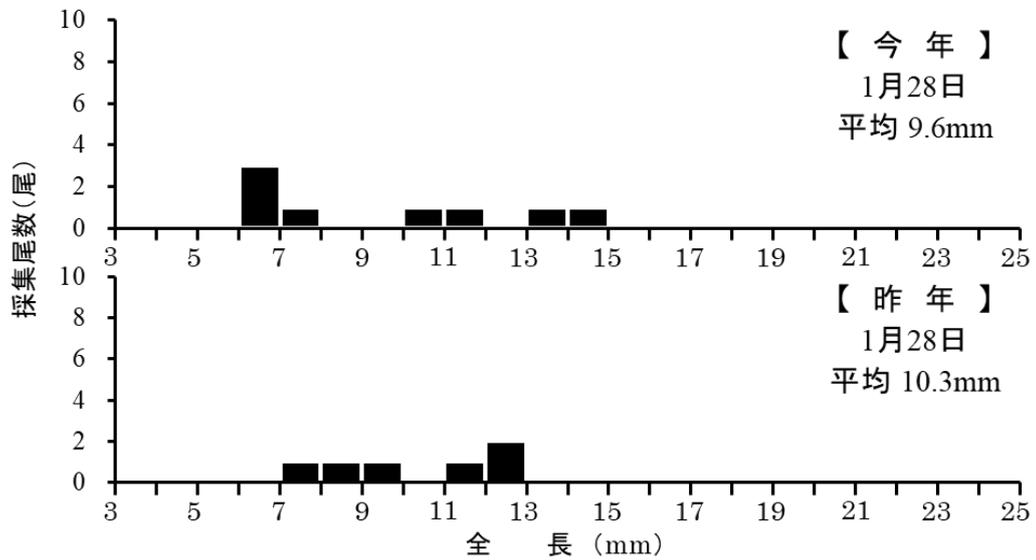


図5 大阪湾で採集された稚仔の全長組成

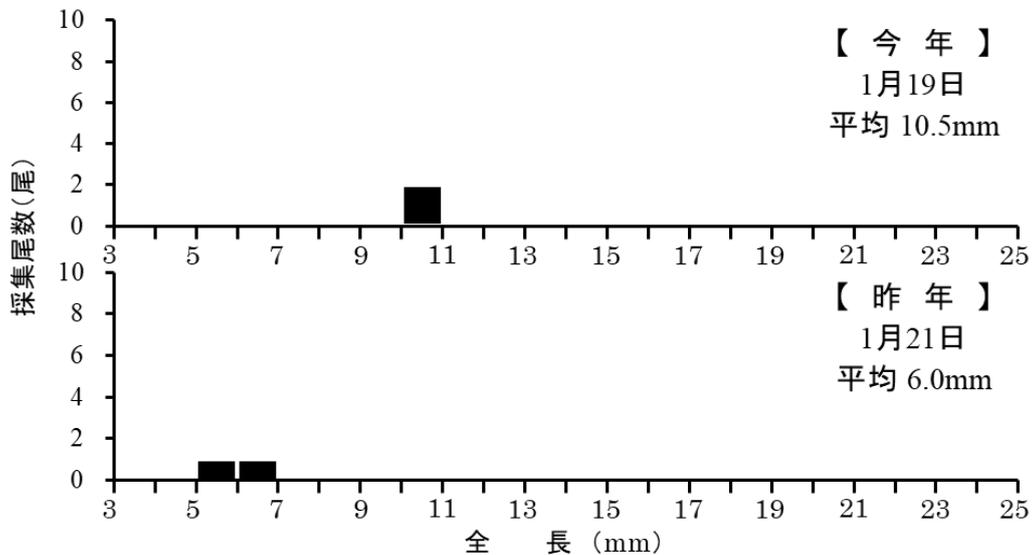


図6 紀伊水道で採集された稚仔の全長組成

3. 稚仔の成育の見通し

稚仔の成長速度は水温の影響を強く受け、水温が高いほど成長速度は速くなる。今年の明石海峡部の水温は、平年（平成 27～令和 6 年の 10 年間の平均値）に比べ 1 月上旬はやや高め、中旬はほぼ平年並み、下旬以降は低めに推移している（図 7）。

2 月 12 日に大阪管区气象台から発表された平均気温の 1 か月予報から判断すると、今後の水温は徐々に平年並みに回復すると予測されることから、稚仔も平年並みの速度で成長すると考えられる。

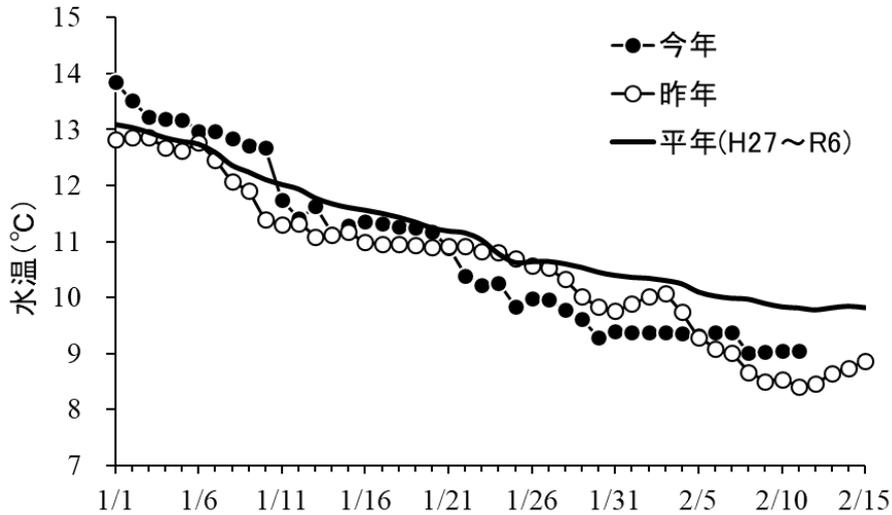


図7 明石海峡部1.5m層日平均水温の推移

4. シンコ漁の予測

昨年の漁獲量は、播磨灘では平年（標本漁協における昭和 62 年～令和 5 年の平均値）を大きく下回り、一昨年と同様に低水準であった。大阪湾では資源保護のため一昨年に続いて操業を自粛、紀伊水道では漁獲がない状態であった。

今年も昨年と同様に親魚の産卵量、稚仔の分布量は平年を大きく下回り、不漁が続く平成 29 年以降回復の兆しが見られていない。したがって、今年のシンコ漁獲量は 3 海域とも平年を大きく下回り、昨年同様厳しい漁模様が予想される。

※) イカナゴの資源量は近年危機的な状況にあることから、産卵親魚を最大限に残すための取組がこれまで以上に必要である。

【参考資料】

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所から、備讃瀬戸で実施された親魚調査並びに備讃瀬戸から播磨灘西部で実施された稚仔魚調査の結果が公表されている。今年の親魚密度、仔稚魚の出現量は過去最低であった昨年をさらに下回っており、本種の資源状態が悪化の一途をたどっていることが示唆されている。

詳細についてはホームページ参照。

https://www.fra.go.jp/shigen/fisheries_resources/result/ikanago.html